

全国中国語教育協議会

ニューズレター

第20号

2001年7月7日発行

大学設置基準の改正で、今後は教育上の能力が重視され、 いよいよ中国語教育学会への発展も求められる状況に

本年3月に、大学設置基準の一部改正が文部省令として告示された。そのなかで今後、教員の資格として教育上の能力重視を明確にするとして、大学教員の資格審査では教育上の経歴・経験、教育方法の実践例、過去に作成した教科書・教材、当該教員の教育上の能力に関する大学の評価及び職務上の実績等を踏まえ、教育上の能力等を有しているかどうかを判定する、という。従来の研究業績調書のほかに、上記の項目について記入する教育研究業績書の書式も提示され、研究業績は必須でないとも述べている。これまで、とかく論文の本数ばかり重視され、すぐれた教材を作っても業績にはカウントしない傾向があった。今後は教科書の質もこれまで以上に問われ、教育実践に直結する業績が重視される。教員の研修や、教育論文の刊行等、本会の活動はいよいよ重要となる。その意味でも近い将来における「中国語教育学会」への発展を射程にいれなければならなくなった。

◆ミニ・ニュース◆

会報の発行が遅れがちで申し訳ない。次号は9月上旬に刊行の予定である◆◆8月北京では参加者20名(招聘)という小規模で外国人に対する中国語文法教育に関するシンポジウムが開かれる。次号にその模様を載せる◆◆

✍ 会報・研究ファイル 原稿募集 ✍

会報掲載原稿 ①教室での工夫・授業のアイデアなど②教学実践記録(教案なども含む)③国内外の中国語教育・研究関係学会・研究会・シンポジウム紹介④私の読んだ本(外国語教育の分野で、紹介・書評など)⑤その他、会報にふさわしい内容の原稿。1編1千字以内。ワープロ使用を原則とする。手書きの場合は400字づめの原稿用紙使用。締切は特に設けない。採否は事務局一任とし、随時掲載。《研究ファイル》原稿 会報(ニューズレター)とは別に、とじこみ式の「研究ファイル」を不定期に刊行。中国語学、中国語教育に関する研究論文や外国語教育に関する主張・論説を歓迎。字数は400字づめ原稿用紙に換算して20~40枚程度。形式については既刊のファイルを参照されたい。投稿は理事若干名の審査で採否を決定。原稿はワープロに限り、用紙に印字したものにフロッピーを必ず添付。ファイルの形式はWindowsで作成されたもの(Macintoshは不可)、できればMicrosoft Word文書ファイルが望ましい。

年度会費納入のお願い

本会の経費は年度会費2000円と有志の寄付金によっています。前号送付の際に振り込み用紙を同封いたしました。まだ納入のない方は、ぜひお振り込みをお願い申し上げます。すでに納入済みの方々にはご協力に感謝いたします。今後ともよろしく申し上げます。なお、3年を越えて未払いの方には原則として会報の郵送を中止しております。

事務局のご案内

156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40
日本大学文理学部中文研究室内
全国中国語教育協議会
郵便振替口座 00120-0-364168
(会費・寄付金振込にご利用下さい)
なお、お問い合わせ・ご連絡等は、専従の事務局員がおりませんので、お手数でも郵便でお願いいたします。

【01年度セミナー記録(要旨・その1)】

(4月)4月14日(土)「発音・朗読クリニック」 講師 東京外国語大学 孫 玄齡

提出されたテープをもとに、受講者の朗読の改善点を指摘しながらの講義。受講者には各自の発音の注意が細かく記された用紙があらかじめ配られるので、自分の朗読のまずい点を確認しながら講義を受けることが出来る。課題1の韻母・声母・単語では、「eは喉を絞めつけすぎず、明るい音で」といった注意から声調や声母による韻母の発音の違いなどを細かく指導し、正確に発音しようと力んで却って不自然な音になってしまう例などを挙げる。課題2は文体の異なる3種類の文章だが、各文章に共通して、重音や読む速さ、間の取り方について注意される。自分ではそれらしく、うまく調子をつけて読んでいるつもりでも、急に速さが変わって不安定であるとか、間の取り方が足りないとか、切るべきでないところで途切れてしまっているとか、今後の課題が山積みとなる。特に3番目の文章は口語体の笑い話の中に五言絶句に始まって3字文、6字文、シナリオといった異なる文体が更に含まれており、読み分けが難しかった。孫先生の朗読に聞き惚れることもさることながら、ただの発音概説に終わらず、一步も二歩も踏み込んだ内容で講義の満足度は高い。また、受講者に返却されるテープの最後には先生御自身によるお手本が吹き込まれていて、その場1回かぎりではなく今後の自習が可能になっている。(島田亜実) 9月の月例セミナーは新課題で再度クリニックを行います。p.4参照。

(5月)5月12日(土)「中国語教育と認知文法」 講師 大阪外国語大学 古川 裕

文法研究を教育面に生かすことはなかなか難しいものであるが、本講義は文法の大きな枠組みから個々の文型を観ることで中国語の本質というべきものを突いており、これからの教科書の記述や教学の順序を変えてしまうかもしれない。処置文と受身文のボイス転換については近年研究面において発表されてきたが(“大风把窗户吹开了。”と“窗户被大风吹开了。”など)、今回の講義ではこれに“叫/使”と“为”による感情表現でのボイス転換(“这个消息叫我们很难过。”と“我们为这个消息很难过。”)を加え、焦点の移動により文型の選択の起こる様子がより広い視野で見渡せるようになった。また、教学においてしばしば無視されてきた消失文・奪取文を取り上げることで、存現文における「出現→存在→消失(→出現)」のグループ、授受文における「授与-与奪融合-奪取」のグループを捉え直した。ここに更に結果目的語・消失目的語を加えて、この2つのグループの橋渡しとし、今まで考えられもしなかった、各グループ内及び各グループ間の結びつきが明らかになった。本講義は驚きの連続でもあった。(島田亜実)

(6月)6月9日(土)「新刊中国語教科書を採点する」 講師 日本大学 輿水 優

2001年度の新刊初中級中国語教科書のうち、講師の手元に届けられた12点を対象に、きわめて主観的ではあるが問題点の指摘を試みた。今回は出版社からも編集者の方々が参加された。たまたま、新刊のなかに初めてカラー印刷の音節表を作成して発音解説に重点をおくユニークなテキストがあり、一般の教科書の掲載する中国語音節表について検証することとした。音節数は音節表によって異なるが、いずれも根拠が示されていない。だれの作表なのか不明である。介音、介母などという術語が無造作に使われている。欄外に簡単なコメントを添える試みをするものも出て来たが不十分であり、ほとんどが付録の扱いで、折角の音節表を有効に活用することができない。次に巻頭の概説などで、中国の漢字に関する説明に誤りが多すぎる。例字に異体字整理、簡体字制定、印刷通用字体の3つの改革から生まれた漢字を列举 (p.3につづく)

(p.2からつづく)しながら、解説では簡化字総表だけを脳裏において、総数2200字などとするものもある。方言地図をよく見ると4年前に返還された香港に、なお“英占”の2字がついている例もあり、図表や写真には、誤り、情報量ゼロ、無神経な扱いのものが多い。中国人著者による単著や、中国人との共著が目立つのが、物語性を重んじ第一課から質も量も中級なみ、したがって一課の文法事項が多すぎる、といった傾向。日本人著者が段階的な学習設計に基づいて執筆し、中国人に手を入れてもらう方がよい。中国人の著に目立つが、語の分かち書きがでたらめ、日本語のおかしいものさえある。楽しく学ばせようとしたものか、課文や解説で無理にこじつけたユーモア(だじゃれ)を乱発する教科書も多い。楽しさと「だじゃれ」の履き違えが顕著で、ギャグに凝るあまり、不適切な例示、文法解説の誤り、といった教科書作りに対する無神経さが気になった。辞書や教科書は、文法用語を使う以上、その著者の中国語観や文法体系が理解できる方を講じてほしい。その点で、遠藤光暁氏と中野達氏の著では文法の扱いに共感を覚えた。文法を説く例文の簡要にして容易な点は他著も見習うべきである。(輿水優)

.....
【中国語教育リサーチ・レポート】

第七届国际汉语教学讨论会



【今回ご紹介するシンポジウムは世界漢語教学学会の大会で、この学会については、すでにこの欄で取り上げているが、同学会の最近の消息をお伝えする意味で、掲載した。

去る5月中旬に上海で世界漢語教学学会の常任理事会が開催され、2002年に香港を予定していた第7回国際中国語教育シンポジウムの会場変更の件が議せられた。前回のハノーバーにおける大会で次回開催を引き受けた香港大学からは、香港の経済が低落傾向にあり、経費負担の見込みがつかないこと、同大学の校長が昨年交替し、大規模の学会開催には時期がよくないことを理由として、さらに3年後の大会を引き受けたい旨の説明があった。常任理事会はこれを了承し、香港とともに候補地となっていた上海に場所を移すこととした。さいわい、復旦大学と上海外国語大学から申し出があり、常任理事の実地調査等による検討の結果、原則的に復旦大学を主会場とし、上海外語でも交流活動を行うことに決した。これによって3年に1度の大型シンポジウムは下記の通り開催されることとなり、会員にはすでに通知が始まっている。

第7回国際中国語教育シンポジウム開催要項

日時：2002年8月2日～6日(8月1日受付) 場所：上海復旦大学 使用言語：中国語に限る。
費用：往復旅費、会議期間中の宿泊費と食費は自己負担。宿泊は1室1人1日100元(12ドル)、1室2人使用の場合は1人1日60元(7ドル)、食費は1人1日80元(10ドル)。出席者は参加費として500元(64ドル)を納入、ただし世界漢語教学学会の終身会員は参加費を半額にする。
論文提出方法：2002年1月31日までに論文3部(そのうち2部は記名しない)を学会の事務局に郵送する。専門家による選考の通過者には、同年4月以降に招聘状を送る。論文は手書きを認めず、すべてパソコン入力、A4判とする。なお、今回のシンポジウムのテーマは下記の通り。
本屆学术讨论会的中心议题：1)21世纪汉语(第二语言)教育构想。2)汉语本体研究。3)语言学习理论研究。4)汉语(第二语言)教学与应用语言学、对比语言学、心理语言学。5)对不同母语的汉语教学研究。6)汉语教学与文化教学及汉学。7)现代科技手段在汉语教学中的应用。

☆世界漢語教学学会の事務局所在地を知りたい方にはお知らせしますのでご一報ください。

2001年度セミナー(後期前半)のご案内

今年度後期も、9月から12月まで合計4回、土曜日の午後を利用した月例セミナー(教員研修)を実施します。月例セミナーは各月第2土曜を原則としています。

これまで、各年度とも前期と後期に分け、それぞれ一括してご案内とお申し込みの受付をしていましたが、かなり先の日程になると予定がたたず、その結果お申し込みが鈍ることもある、と判断して今回から2回分ずつのご案内をすることになりました。以下は後期前半のみのご案内で、後期後半のご案内は9月中旬発行予定の次号会報に掲載いたします。今回のお申し込みは直ちに開始し、定員30名で締め切ります。

なお、従来の参加者から意見票(兼質問票)を事前にお送りいただく方式は、事務局の都合で、今年度は中止し、会場で質問や意見交換の時間を十分とれるようにします。

2001年度9月～10月セミナー要項

☆各回の日程および研修テーマと講師

(9月)9月8日(土)「発音・朗読クリニック」

講師 東京外国語大学客員教授 孫玄齡氏

【事務局からの一言】参加者に朗読等の材料を事前に送付して録音テープをご提出いただき、当日、会場で講師が個別コメントと解説をいたします。音楽がご専門の孫先生のお話には一同酔いしれる、という形容がピッタリ。年度内1回の予定で、すでに4月に実施済みでしたが、好評のためアンコール。新しい課題で発音と朗読のコツをお話しくだけいます。

なお、課題は7月末までに申し込み者あて郵送の予定です。

(10月)10月13日(土)「中国語教育縦横談」〔仮題〕

講師 大妻女子大学教授 高橋均氏

【事務局からの一言】古代漢語から現代漢語まで幅広い研究領域と、講習会から学校まで豊富な教育経験、そして中国語友の会運営と月刊「中国語」誌編集(本年9月に500号記念)を多年にわたり担当と、そのご経歴からも中国語教育に関して様々な視角からお話しいただけると思います。

☆時間割りと会場

各回とも研修時間は、午後1時半～4時半(1時10分受付開始)。

会場は従前通り(財)国際文化フォーラム会議室(新宿駅西口、新宿第一生命ビル26F)

☆申し込み方法 葉書に参加希望の月と、氏名・連絡先(住所)・所属・中国語教育歴をお書きの上、事務局へお送りください。お申し込みの方にはご案内と受講料の振込用紙を郵送します。受講料は1回=¥2,500、2回一括申し込みは¥4,500です。今回お申し込みの方が今年度後期後半(11、12月)も受講される場合、後半は各回¥2,000です。